

桑原武夫集
7

1965
}
1969

岩波書店刊行

桑原武夫集 7

第七回配本(全十卷)

一九八〇年一〇月一七日 発行

定価 四〇〇〇円

著者 桑原武夫

発行者 緑川亨

発行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目十五番

電話 〇三六五五二一
振替 東京六〇三三〇

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 桑原武夫 1980

凡 例

一、この集は、桑原武夫の作品の中から、代表的ないし主要的と思われるものを、著者が自選し、これを年代順に配列し、十巻にまとめたものである。

一、配列は、ジャンルの如何を問わず、すべて発表年代順によつた。ただし、編集の都合上、厳密に順序に従えなかつた場合も稀れにある。

一、初出の場所と年月は各作品の末尾にしるした。

一、挿入写真のうち、桑原撮影のものには*印を付した。

一、テキストは原則として最近のものを用いた。また、今回若干の訂正を加えたものもある。以後これを定本とする。

一、反訳、対談、座談は収めないが、調べのつく限り、全著作目録には記載した。

一、第十巻には、全著作目録、年譜、索引を入れる。

目次

凡例

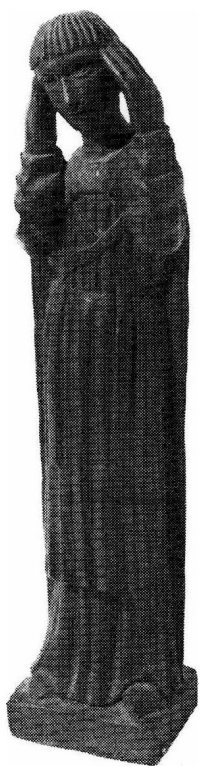
一九五	近代日本における歴史学	2
	ある明治のナショナルリスト	55
	萩原朔太郎の庭見物	69
	憲法第一章についての感想	76
	ふたたび江刈村へ	83
	ベトナムについての感想	94
一九六	和魂洋才の変転	100
	人間兆民	107
	ふるさとを行く	179

心の痕跡	190
今西錦司論序説	193
名を知っているということ	206
東北の可能性	212
明治百年を迎えて	216
こころづくし	221
小島祐馬先生をしのぶ	225
『桂春団治』序にかえて	230
近代化における先進と後進	238
文学価値論	246
西洋崇拜からの脱却	298
人民史家ミシュレ	302
私のなかの中国	353

目次

ヨーロッパと日本	364
人文科学における共同研究	381
読書家と観察者	409
仙台の五年間	414
中天に輝く球体	422
桑原隲蔵小伝	434
父の手帳	442
トレギエから	447
トレギエの二週間	468
一九六九 現代社会における芸術	478
日本の百科全書家新井白石	507
自 跋	559
挿絵目録	579

1965



ブルターニュの木彫

近代日本における歴史学

はじめに

「歴史の思想」としてここに収めたのは、明治から昭和初期までに、日本の代表的歴史家によって書かれたもののうち、今日もなお生命を失わぬ、いわば古典的作品である。ただ、この叢書（筑摩書房『現代日本思想大系』）では、マルクス主義のために二巻が用意されているので、マルクス主義に立つ歴史家の作品は、そちらに譲った。代表的歴史家は、いうまでもなくこの八人につきないので、こうした便法を講じてみても、なお紙数の制約から割愛せざるをえぬ歴史家と作品が少なくなかった。

歴史的世界に生きている私たちにとっては、あらゆるものが歴史的考究の対象となりうる。したがって「歴史の思想」という言葉は、きわめて広い範囲にまで及ぼすことができるであろう。そして福沢諭吉、和辻哲郎らにすぐれた歴史の思想が見出されることは確実である。しかし、ここではこの言葉を、歴史家たちが作品を通して語った思想という意味にとっておく。歴史を愛好するが、みずから歴史学者ではないところの編者が、その視界に入ったもののうちから、マルクス史学登場

までの日本近代史学を代表するとおもふ歴史家の作品十四をえらんだのであって、近代日本における歴史学の形成ないし発展を、代表的学術論文の配列によって示そうとしたものではない。歴史家が自分の研究をふまえて、同業者だけにではなく、ひろく人々に語りかけ、人々に読まれることを期待して書いた作品のなかに含まれる思想を示そうというのである。その思想は、歴史家の史観にささえられる。むしろ史観そのものというべきかもしれない。だからここでは、いかに学界に貢献したにせよ、史料収集家や文献学者の書きものは除外する。このように述べたことで、すでに私の編集方針はおおよそ推察されたかと思うが、以下それぞれの歴史家について、その選択理由をややくわしく述べることによって、間接に近代日本における歴史作品のあり方と、その系列について少しくふれることになるであらう。

中国の唐の歴史家、劉知幾は、歴史家に必要な資格として、「学・識・才」の三つをあげている。清朝の章学誠の解釈によると、「学」とは、ひろく史料に通じている博学のこと、「識」とは、見識あるいは洞察力、「才」とは、文才、つまり言わんとするところを十分に叙述することのできる表現力をさすという(宮崎市定『中国の歴史思想』による)。こんにち、日本で特定の歴史作品を評価するさい、その著者における三つの資格は、どのように見られているだろうか。最も重視されるのは、おそらく「学」であって、洞察力というよりむしろ所属する思想的立場という意味において、「識」もまた論ぜられるが、「才」にふれられることは、ほとんど稀れであるといつてよい。歴史がもつ

ばら歴史科学として受けとられていることを端的に示すものであろう。

しかし歴史は、ギリシャにおいては、美神クリオミューズに守られるところの芸術の一つとして、物語とつらなるものであった。だからこそ、合理主義者デカルトの軽蔑するところとなったのだが、十九世紀にいたって、自然科学の急激な発達に刺激され、ないしはその権威の圧力のもとに、歴史は文学の領域からしだいに科学の領域に移行する。しかしなおフンボルトは、歴史家と詩人との類似を説き、ランケは「歴史は科学であると同時に芸術だ」といい、過去の事実の究明だけに満足せず、ギリシャ・ローマの大歴史家にならって、すぐれた史筆をふるいたいと考えていたのである。すなわちヨーロッパでは、文学から科学への移行が歴史学界の大勢であったにせよ、その移行は軽薄な転向によってなされたものではなかった。そして今日でも歴史書の構成ないし文章の良否は、学識ないし史観とともに重要視されるのである。

歴史が過去の「全的な生活の復活」(ミッシュレ)ないし「過去の経験の再現実化、再制定」(コーリングウッド)であるという基本的性格は、歴史の科学化によっても変わるべきものではない。方法の科学化によって過去の文学的再現から過去の理論的再構成と現われ方は変ったにせよ、過去をより正確に人々の前に提示しようとする意図に変わりはないのである。人々はいまも過去の再現を歴史に要求しており、その要求は素朴にして健全なものだといわなければならない。しかし日本の歴史学者は、この自然な要求にたいして冷淡にすぎ、科学的実証という美名にかくれた「歴史のための歴史」主

義者かと疑わせるふしがあった。そこで文学者が、歴史文学とよばれるところのものによって欲求不満の人々の渴をみたさねばならぬことになった。その事情は、かつての日本文壇における純文学と大衆文学との対立を思わしめるものがある。

歴史研究が厳密なドキュメンテーションを前提とすることはいうまでもない。そして良質な知識の蓄積、すなわち「学」が基本となることは当然である。しかしその「学」だけにとどまるならば、それは史料収集家ではあっても、ついに歴史家の名にたたいしないであろう。近代日本には、歴史家が乏しすぎるのである。歴史家は、すぐれた見識と鋭い洞察力、すなわち「識」をもって過去を構築しなければならぬが、それを客観化するさいに、いや、むしろ客観的把握の過程そのものにおいて「才」の重要性が自覚されなければならない。その才とは、文章の一句一句の美しさだけではなく、いや、むしろ作品全体の構成、その展開、そのはこびのリズムを意味する。歴史を書くということが研究室内のみのいとなみでなく、日本の人々のためのものであるという本務が自覚されるとき、日本の歴史界は、あらためて歴史叙述の問題の反省にいざなわれるはずである。

1 歴史叙述

もと、芸術の一ジャンルとして文学とかさなっていた歴史は、近代にいたって、文学と袂を分かつた。こんにち、歴史が学問であることを疑う人はあるまい。しかし、学問であるということは、

ただちに歴史がサイエンスであることを意味しない。歴史科学ということばは、次第に通用度を高めてはいるが、そこにはなお抵抗がある。とくにヨーロッパにおいてはそうである。私たちからみれば、明らかに科学的歴史家の模範といってよいように思われる、フランス革命研究の最高峰であったジョルジュ・ルフェーヴルは、生涯、自分の仕事をサイエンスと称することをがえんじなかつた。フランスでは今もそうした考えの歴史家の方が多いという。

歴史をサイエンスという以上、法則追究を目標とせねばなるまいが、歴史法則は、自然科学における法則と同じものでありうるだろうか。または類似しているにしても、どこかに相違があるのではないだろうか。その相違はどこにあるのか。それにそもそも、自然科学における法則といわれるもの自体が、十九世紀的な決定論的性格をうしない、現在ではむしろ傾向性、あるいは新しい研究の道を開くための仮説と考えられるようになっていっているのではなからうか。日本の歴史学界には、そうした疑問を解こうと努力した上でのことではなく、ただサイエンスの圧倒的勝利は世界の大勢であり、世界の大勢には従わねばならぬといったほどの順応論から、ほとんど抵抗を示さずに、歴史をサイエンスとよぶことにきめてしまった弱さがあったように思われる。

歴史をサイエンスの一部とみなすことに抵抗しうるものはなにか。それは文学と強く結びつきつつ、しかも堅実な学問としての性格を失わぬ歴史叙述でなければならぬ。ところが、わが国には、『太平記』『平家物語』などの歴史文学はあったが、「歴史の叙述は大いなる芸術であり、おそらく

最も困難な仕事の一つであろう。それは散文で書かれるけれども、生命の神秘愛の多くを伝え、別の時代の雰囲気の一部を、すぐれた詩と同様に同じ芸術的な形式をもって伝達することができる」といったE・H・ノーマンの要請にこたえうるような作品は、不幸にして明治以前にも、また明治以後にもはなはだ乏しかった。ギボンの『ローマ帝国衰亡史』、ブルクハルトの『イタリア・ルネサンスの文化』、ミシュレの『フランス革命史』といった、あくまで真実追求をめざしながら、しかも才筆の見事なはこびによって読者の心をとらえる、歴史叙述の古典ともいうべきものは、明治以前のわが国では、新井白石の『藩翰譜』などにわずかに見られるにすぎない。しかも抵抗放棄の安易な精神は、わずかながらも存在する過去の拠点に無関心となり、これを見失うにいたったのである(文章家としての白石を無視しえた精神は、先史学の必要について恐らく世界で最もはやく発想した彼の佐久間洞巖への手紙の存在にも気づかぬことになる)。

文学と簡単に絶縁しえた歴史学者は、真の意味での科学とも深く結びつきえなかったのではなからうか。科学の専門分化は、これまた世界の大勢であるが、簡単にそれに順応して、日本史を世界的視野において見ることを忘れるのみでなく、その日本史をすらさらに時代に細分し、狭い領域の専門家となることによって、歴史科学者となりえたかのような錯覚のなかで、実は歴史の技術者ないし史料蒐集家に終っている人が多すぎるのではないか。いうまでもなく歴史は事実の学であって、事実の発見、その真偽の判別、その相互関係などを調べることを基礎的作業とする。しかしそうし

た個別作業を実証科学的におこなうだけでは、まだ歴史ではない。歴史はつねに全的把握を必要とする。たとえ限られた時期の限られた問題をあつかうにしても、そこに全的把握の光がさしていなければ、それは歴史の部分品であつて、歴史とはいえない。学問の科学的専門化と精密化という美名が人々を欠陥に無感覚にしているが、今日の日本ほど、歴史書の乏しい時代はないのではないか。

「歴史は現在と過去との対話である」とE・H・カーがいうのは正しい。歴史事実は不動の完成品として私たちの外にそびえており、歴史作品はそれを模写ないし反映したものであると考えることはできない。歴史作品は歴史家が過去に語りかけたときのみ生まれる。その歴史家の存在は場所と時間とに大きく規制されるが、彼らの人生観、世界観はそれぞれに相違し、彼らはその人生観、世界観によつて過去に問いかけるほかはないのである。そして、その対話を書きしるす文体にいたつては、なおさら各人差異があるであらう。「歴史上の事実というものは、歴史家がこれを創造するまでは、どの歴史家にとつても存在するものではない」とカール・ベッカーはいったというが、この刺激的な発言中の「創造」とはたんなる事実の発見ではありえない。その事実を吟味した上で文章にしるすことを意味するのであらう。そう解すれば、過去に実在した事実は歴史家の筆端を通過することによつて、はじめて歴史事実となるとさえいえるのである。太古から現代にいたるまでの歴史過程を一人の筆で書きしるした通史なるものの必要性は、これだけでも明らかである。

宋の鄭樵^{ていしやう}は、歴史は通史を主とすべきで、断代史は歴史の本旨にそわぬ、と主張した(内藤湖南『支那史学史』二八六ページ)。歴史の各時代のあいだには相互に因果の關係があるから、古今を通じて一貫して書かねばならない。王朝などを中心に、一代ごとに記録をもとめるのは、史料の整理ではあっても、真の歴史ではない、というのである。卓見としなければならぬ。歴史上の各時代をそれぞれ別の多くの専門家が分担し、さらに一つの時代をさまざまの分野の専門家に分割し、当然それぞれ別の思想と文体とをもって執筆したものをつらね組合わせることによって、はたして民族の発展あるいは盛衰の一貫した流れをとらえうるであろうか。たとえば「日露戦争」と題しながら、日本海海戦という言葉が一度も出てこず、この戦争は日露の双方において帝国主義戦争だったことのみを明らかにしたような論文がある。そういう部分品を並列した講義録を歴史と思いこむように、学問の専門化という迷信が人々をみちびいてしまったのである。しかし、世界ならびに日本の未来を大きな視野から構想することが何より要請されている今こそ、太古から現代までを一人の歴史家が叙述する通史が不可欠なはずである。そうした通史によって全体像が成立してからでなければ、きびしい批判も警拔な新解釈も無意味となるであろう。しかも戦後、このような試みがはたして幾度こころみられたであろうか。まさに寥々たるものである。この現代歴史科学者の怠慢を思うとき、私たちはふたたび竹越与三郎の『二千五百年史』につれもどされる。古代の部分が薄弱であり、大正以降の研究成果は当然生かされていないから、細目において改めねばならぬ点のあることはい



竹越与三郎

までもない。にもかかわらず、今から六十数年前に、三十一歳の青年によって書かれた、この若々しい日本国民の歴史を凌駕する通史は、不幸にしてその後書かれていないのである。

徳富蘇峰の主宰する民友社から輩出した人材はいちいちかぞえるにたえない。歴史の分野においても、蘇峰自身のほかに山路愛山とこの竹越があるといえ、福沢諭吉、田口卯吉以後の在野史学のは

とんどすべてを代表するといっても過言ではなからう。しかし、この主宰者が「近代日本の文化の転移を、明治・大正・昭和にわたって、もっともなだらかな曲線でたどっている背骨」(吉本隆明)であってみれば、民友社に属したということだけでは多くを明らかにしたことになるまい。時期が問題である。竹越は、慶応義塾在学当時、福沢諭吉が国権論を塾生たちに愉快げに聞かせているのに反撥して、批判の長い手紙を出したことがあり(『三又小品』一三一ページ)、福沢の推薦で入社した『時事新報』も福沢の官民調和論に反対してすぐ退社し、一八九〇年(明治二十三年)、『国民新聞』